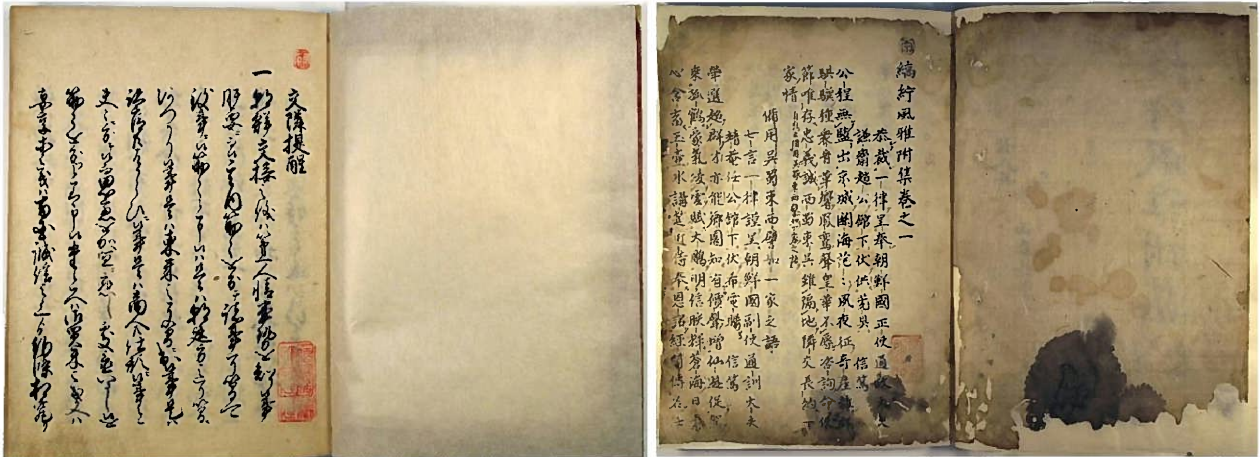


資料番号	J. III-1	資料名	雨森芳洲関係資料
------	----------	-----	----------

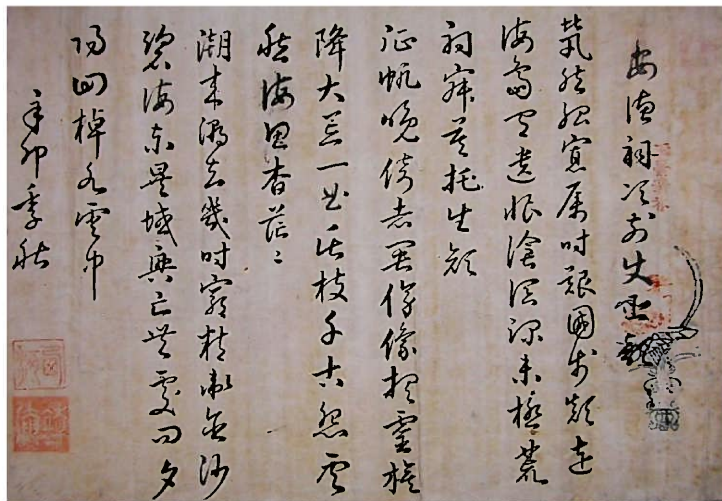


・交隣提醒 冊子装 紙本墨書
〔縦×横〕 25.7×19.5cm

・縞紵風雅附集 冊子装 紙本墨書
〔縦×横〕 28.9×20.2cm

雨森芳洲（1668～1755）は、17～18世紀、対馬藩（現・長崎県対馬市）に仕えた儒学者である。日本語のみならず、朝鮮語と中国語も自在に操った、当時の日本ではまれな国際人。対馬藩では朝鮮国との外交の任に携わり、外交の基本は「誠意と信義の交流」と説いた。また、通信使を随行して2度、対馬～江戸間を往復し、随員の学者との交流を重ねるなど、自らも善隣外交の実践に努めた。本資料群36点は、自身の経験を踏まえた朝鮮外交の指針書「交隣提醒」、芳洲が編集した日本初の朝鮮語学書「全一道人」、1711年来日した通信使と日本の学者たちとの交流詩や筆談をまとめた「縞紵風雅集・同附集」などであり、雨森芳洲の子孫の家に伝来したものである。

資料番号	J. III-2	資料名	朝鮮通信使副使任守幹 壇ノ浦懷古詩
------	----------	-----	-------------------



紙本墨書 〔縦×横〕 32.5×42.6cm

山口県下関市の赤間神宮に遺る1711年の朝鮮通信使副使任守幹の詩。朝鮮通信使の下関での客館は、赤間神宮の前身である阿弥陀寺。各使行の通信使はここに宿泊して、安徳天皇の悲劇を訊ね遺像を拝観し、壇ノ浦懷古詩を作詩することを慣例とした。また、その詩は探賊使として1604年来日し、日朝の国交回復に尽力した松雲大師の壇ノ浦懷古詩の韻を必ず踏襲した。阿弥陀寺には江戸時代、朝鮮通信使の壇ノ浦懷古詩16点があり、長州藩の学者に学問的な影響を与えたが、現在はこの1点のみ遺る。各使行の朝鮮通信使が松雲大師の業績を偲んで作詩していることは注目される。